

＜書評＞ナヨン・エイミー・クォン『親密な帝国 朝鮮・日本における文化協力と植民主義的モダニテ イ』

著者	渡辺 直紀
雑誌名	日本研究
巻	55
ページ	253-256
発行年	2017-05-31
その他の言語のタイトル	Nayoung Aimee Kwon, <i>Intimate Empire: Collaboration and Colonial Modernity in Korea and Japan</i> . Durham: Duke University Press, 2015
URL	http://doi.org/10.15055/00006594

ナヨン・エイミー・クオン

『親密な帝国——朝鮮・日本における文化協力と植民主義的モダニティ』

Nayoung Aimee Kwon, *Intimate Empire: Collaboration and Colonial Modernity in Korea and Japan*. Durham: Duke University Press, 2015

渡辺直紀



本書は、植民地朝鮮の文学作品や作家の立ち位置を中心に見ながら、当時の朝鮮と帝国日本がかわした、さまざまなレベルの

「親密な」(intimate)文化接触と、戦後／解放後におけるそのポストコロニアル的な消去／忘却について、批判的に検討している。

一九四五年の帝国日本の崩壊は、同時に東アジア地域における新たな冷戦権力の勃興を促したが、一方で、日本や朝鮮半島にその後形成される国民国家的な歴史観は、これらの、かつて遍在した、しかし議論の余地がきわめて多い、帝国時代の文化の相互作用の記憶を巧妙に抹消していった。著者のナヨン・エイミー・クオン(Nayoung Aimee Kwon)は、そのようにかつて共有され、そして後に否認されていた帝国の遭遇や相互作用、そしていまだ競合する

記憶の遺産が、東アジアにおける帝国的文化統合の複製と再生産を促していることを見事に指摘する。

著者は、現在、米・デューク大学アジア・中東学部准教授で、特に植民地朝鮮における文学や映画、女性表象やヴィジュアルイメージが、みずからのエスニシティ(民族性)を保護したまま、いかに帝国の文化統合に寄与し、またそれが解放後の韓国における国民主義の形成にまで影響を及ぼしたかを中心に、実に示唆的な研究を数多く進めている。

本書の各章のタイトルは以下の通りである。

1. Colonial Modernity and the Conundrum of Representation

2. Translating Korean Literature
3. A Minor Writer
4. *Into the Light*
5. Colonial Abject
6. Performing Colonial Kirsch
7. Overhearing Transcolonial Roundtables
8. Turning Local
9. Forgetting Manchurian Memories
10. Paradox of Postcoloniality

このうち、第一章と第二章は、朝鮮の近代小説の嚆矢とされる長篇『無情』（一九一七）を書いた小説家・李光洙^{イグアンズ}が、日本留学時に残した啓蒙的な文章や、植民地末期に書いた対日協力的な時論を検討している。著者はそこで、その使用言語（朝鮮語か日本語か、あるいは朝鮮語でもどのような文体を使用したか）やアドレスの多様性（誰に向かって書いたか）について検討しながら、植民地下の作家が背負った、表象行為の困難性（the Conundrum of Representation）について指摘する。また、第三章から第七章までは、金史良や張赫宙など、主として帝国日本の東京文壇で、あるいは植民地朝鮮の京城文壇で、日本語と朝鮮語をそれぞれに駆使しながら文学活動をおこなった作家の立ち位置やアドレスの問題を検討し

ている。そして、第八章と第九章では、当時、植民地朝鮮の文壇で話題となった、文学上の「地方主義」の問題について検討しながら、植民地朝鮮のさらに「辺境」や「地方」の空間として機能した「間島」（満州国東部、現在の延辺）において、朝鮮語女性作家として活躍した姜敬愛の文学活動についても触れている。そして最後に第十章で、あらためて李光洙や張赫宙による日本語創作について触れながら、それらに対する評価や研究が、戦後／解放後の韓国において、かつての帝国の言語であった日本語が後景化していくなかで、どのように変化しずれていったかについて指摘している。全十章のうちのいくつかは、著者が二〇〇七年にUCLAに提出した博士学位論文『翻訳された遭遇と帝国——植民地朝鮮と亡命の文学』（*Translated Encounters and Empire: Colonial Korea and the Literature of Exile*）をもとにしているが、本書での議論の質と量は、この論文のそれをはるかに凌駕している。

著者は、本書の全般にわたって、主として植民地朝鮮における日本語文学創作について扱いながら、それが対日協力であるかどうかと単純に二分法的に評価せず、それぞれの作家や作品が創作され、発話される場やナラティブの問題を軸に、作家における主体や欲望の問題や、帝国におけるコラボレーションの力学の問題を扱っている。著者がここで扱っている作家のうち、李光洙は主として朝鮮語で創作したので、朝鮮の文学および文学史研究にお

いて評価され、金史良や張赫宙は主として日本語で創作活動をおこなったので、日本の文学および文学史研究において評価されてきた。だが、従来の研究で、李光洙は、明らかに植民地朝鮮において最も卓越した能力を発揮した作家であつたにもかかわらず、その対日協力の「優秀さ」のために、解放後の韓国の文学研究ではかなり微妙な評価が下されている（北朝鮮においては、さらに李光洙の後期の文学活動についてはほとんど無視している）。また、日本における金史良や張赫宙に対する研究も、張赫宙が植民地末期に露骨に対日協力的な態度を示し、一九四五年の解放後、日本に帰化したのに比べ、金史良は、植民地下において、在日朝鮮人学生のアイデンティティや主体の問題を扱い、解放後、朝鮮戦争中に北朝鮮の従軍作家として活動中行方不明になるなどの生涯をたどっており、その対日協力の在り方において対照的であるために、やはり二分法的な評価がされてきた。

それに加えて、東アジアにおけるポストコロニアル文学の問題のひとつとして、筆者が問題にするのは、ネイティブ言語の復権つまりかつての帝国の言語としての日本語が後景化し、韓国語が復権していくという、きわめて大きな出来事である。まさにそのために、李光洙を研究する者（主に韓国の研究者）は、主として韓国語で書かれた彼の作品を扱いながら、日本語で書かれた彼の作品や評論を例外的なものとして言及すること、その両者を結

ぶ線や力学を見出せずにいた。また、金史良や張赫宙に対する研究も、彼らが残したものが主として日本語によつて書かれたものであつたために、その研究も日本の研究者たちによつて主として行われてきたが、そのためにかえつて、日本語で形成された彼らの自我や主体意識に言及するだけで、帝国と植民地の狭間に生きた知識人としてのより複雑な心的機制を分析するにはあまりにも不充分であつた。

著者による今回のこの研究は、まさにこのような問題を克服するために書かれたと言える。つまり、著者の説明によれば、李光洙は対日協力的な態度を鮮明にした一九三〇年代後半からだけではなく、文学的経歴の最初期である一九一〇年代後半から最後まで、その「啓蒙主義的」な立場を放棄しなかつたということである（第一章、第二章、第十章）。李光洙が終始一貫主張したのは朝鮮民族の富強の問題であつた。それはまず直接的な力や軍事に訴えるものではなく、将来の独立朝鮮を担う朝鮮民族の精神の強靱さを訴えるものだった。そして、その民族の将来のために、アイロニカルではあるが、彼はときに手段を選ばずに対日協力の道を選んだのであつた。また、主として日本語で創作活動を展開した金史良や張赫宙も、著者の説明によれば（第三章、第六章）、決して、それぞれの文学作品のテーマから作家の姿勢や能力を二分法的に評価するべきではなく、帝国と植民地の狭間に立つ表現者として

の主体性をそれぞれに示した点を評価すべきなのであった。

また、著者は本書のなかで、植民地朝鮮の雑誌メディアに見られる座談会のナラティブの問題や（第七章）、一九三〇年代後半の日本で起こった、いわゆる「朝鮮ブーム」の問題点（第八章）、また、間島（満州国東部）で、女性として、また社会主義志向の作品を書き続けた姜敬愛のエクリチュールの問題点なども（第九章）、同時に検討している。これらの問題を扱う際においても、著者の方法論において一貫しているのは、日本や韓国、どちらかの民族主義的な価値判断からは距離をおきながら、単純に主体と他者の関係を加害と被害の問題におきかえず、それぞれの表現者が、エクリチュールの方法を戦略的に選び取った結果であると結論づけることである。特に座談会や「朝鮮ブーム」の問題は、帝国と植民地という支配／被支配に加えて、二重言語状況をどのように考えるかによって、その検討結果は大きく異なるが、著者は、それぞれの表現者の表現内容を、単に意味内容として理解するのではなく、どのようなコンテクストからそのような表現がなされるのか、そのダイナミクスやナラティブを理解すべきであると強調する。

このように著者は、韓国と日本、それぞれの言語圏で形成されてきた、文学研究のメインストリーム言説に対して、その言語の壁を克服し、また、まさにそのような帝国と植民地の狭間に立つ

た知識人の主体や欲望の問題を、理論的に説明した研究者の一人であるといえる。さまざまなテキストやコンテクストを解釈し説明する際に、著者はときに膨大な批評理論を動員する。そのような態度は、場合によってはやや過剰に見えるが、このような過剰も、冷静にみれば、本書が扱っている問題が、どのような射程のもとで扱われ解決されるべきかを示す指標になっているとも考えられる。そのような点で、本書で行われている、さまざまな研究対象に対する、著者の理論的な説明と、そのために著者がおこなっている、歴史的アーカイブの整理作業は、ともにこの分野の後続世代の研究者の研究に大きく貢献するであろう。